

目的　戦後より今日に至る40年余りの間に、家庭科教育が社会の変化に対応してどのように変わってきたかを、特に被服領域を中心に考察する。そして新しい学習指導要領に対応していくために家庭科教育はどうあるべきか、新しい時代を見すえた被服教育のあり方について何らかの示唆を得たい。今回は第1報として昭和20年から昭和26年までを報告する。

方法　昭和22年に出された「学習指導要領家庭科編（試案）」を中心に、雑誌「主婦の友」及び「暮しの手帖」から衣生活関連の記事をとり出し対応させた。

結果　戦後の物資の不足した時代に、少ない衣料をくりまわして衣服を作り、衣生活を支えていく必要から、更生に重点が置かれており、具体的には「製作」の指導内容が詳細に列記されている。洋裁と和裁はほぼ同率で、戦後の衣生活の洋装化に対応した洋裁教育がすすめられている一方で、地域の実情に応じた和裁の指導も行われるよう配慮されており、和洋二重生活が指摘される以前の衣料の乏しい時代における衣生活の状況がよく反映されている。